

べきではなからうか。

教育は親のものでも、教師のものでも、行政のものでもない。子どもたちのものである。しかし、現実には子ども不在の教育がおのおのの立場で都合よく主張されている場面が多い。責任の転嫁はその分だけ相手に権力を付加するか、それだけ相手から勢力をそぐことであって、けっしてよい結果をきたさない。よい教育が行なわれるよう、みんなでやろうではないか。この態勢がとれるなら、問題のいくつかは、あるいはほとんどが解決の方向に向かうと思うのである。

## 5————むすび

教育行政とはまったくむずかしいものである。家貧にして孝子あらわる。環境は人をつくる。教育のための行政、行政のための教育、子どものための教育、親のための教育、こうした現実のなかで教育というものをもう一度みきわめ、おたがい人であるという自覚にたって、おたがいが納得いくまで話しあい、将来の姿を知り、いまなにをなすべきかを把握し、みんなで力をあわせてやろうではないか。これがいま必要であり、また永遠に必要なだと考え、与えられた課題と目的から非常にはずれているかもしれないが、地方教育行政のあるべき姿のために提言するのである。

<教育委員会事務局企画課長>

## 《コメント》

# 教育行政の硬直化に 提言する

古田 光

## 1————教育行政の基本的姿勢とはなにか

井上高三氏の「教育行政のあり方の再検討」を読ませていただいて、あらためて今日の地方教育行政、とくに横浜市のそれが、実に多くの困難な問題に直面していることを痛感させられた。中央からの統制と現場からの要求の間にはさまれながら限られた予算のなかで、急激な人口増からおこってくる諸問題に取り組んでいかねばならない苦勞は、なみたいていのもではなからう。いずれもそう簡単に解決できる問題ではないのである。こうした現状を少しづつでも明るい方向に打開していくためには、井上氏も指摘しているように、まわり道のようなものはあるが、まず地方教育当局が、これらの具体的な諸問題に対してどのような基本的姿勢をとるべきかという問題が十分に反省され、その自覚的な確立をはかることが大切であろう。なぜならば、その点があいまいであっては、ほんとうに自主的で計画的な教育行政、また人間らしい血のかよった教育行政を推進していくことはむずかしいからである。

井上氏の諸提案は、いずれもこの基本的姿勢のあり方に関するものであって、きわめて重要な意味をもつものと思う。これらの実現をねがうものは、たんに私ひとりだけではあるまい。このことを前提として、この機会に教育行政に対する若干の私見をのべたい。

## 2————パートナーシップの確立

井上氏は「国の行政の姿勢はそのままに地方の教育行政の姿勢を決定していくという因果にある」

とのべておられる。たしかに、現在の行政機構のなかで、国からの統制と指導があることは避けがたい。地方当局の権限と力は限られている。しかし、だからといって、地方当局は国の行政のたんなる下請機関ではないし、またそうであってはならないはずであると私は思う。

《統制》や《指導》には、民主主義的なものもあれば、官僚主義的なものもある。レスター・スミスは、「建設的民主主義のなかでの教育統制」のあり方について、それは「中央の文部省、地方の教育当局、教師たち」という三者の「不断に前進するパートナーシップによる統制」でなければならないことを強調している<『教育入門』>。

地方当局は、中央と現場をつなぎつつ、こうしたパートナーシップをうちたてていくものとしての独自の重要な役割をになっている。こうした責任の自覚を深めて、自主的な態度でことに当たっていただきたいと私は思う。現場からの要求や批判のなかには、たしかに地方当局の権限や力だけではどうにもならないことも多いであろう。しかし他方、地方当局の責任においてなしうること、なすべきこともけっして少なくないはずである。《民主主義》の崩壊を防ぐためにも、この点についてのけじめをはっきりさせた自主的な姿勢の確立を望んでやまない。

### 3———さらに具体的検討を

予算の問題についていえば、いかに現場の要求にこたえようとしても、予算の不足はいかんともしがたいという壁はたしかにあるだろう。今日の国民生活における教育問題の比重の増大と横浜市の現状を考えた場合、教育予算はもっと充実されねばならないと思う。そして、限られた予算を有効に使っていくためには、むろんしっかりした建設的な計画が必要である。その場合とくに当局者に望みたいことは、教師や親たちの声に十分耳をか

たむけた上で、重点的であると同時にバランスのとれた計画をつくっていただきたいということである。

そのためには、井上氏も強調しておられるように《話しあい》ということが、とくに大切な意味をもつ。《話しあい》に誠意と努力を傾けることなしに、人々の理解や協力を求めても無理である。《人間尊重》ということは、たんにかけ声であってはならない。ただ頭のなかだけで人間を尊重するのではなく、現実の生きた人間の気持を尊重していくことが必要であり、そのためには《話しあい》を通して相互に理解を深めるといことが不可欠であると思う。

このことなしには、ほんとうに人間らしい、血の通った教育行政はありえないであろう。いろいろな壁はあるにしても、言葉だけではなく、実際にこのような姿勢をつらぬき、これを生かした行政をおこなっていただきたいと思う。そのためには機構的にも、どのようにしてよりよく関係者の声を集約し、人々が納得のいく形で計画や運営をおこなっていきべきかという問題が、さらに具体的に検討されねばならないであろう。機構の《近代化》という問題も、たんに《能率》ということだけでなく、こうした根本的な観点から考えていただきたい。人事の取り扱い方その他、具体的な諸問題についての希望や意見もないわけではないが、まずその取りあげ方、生かし方についての再検討を望みたい。

<横浜国立大学助教授>